

梵珠だより

第112号

青森県立自然ふれあいセンター機関誌

ニホンカワトンボ

発行／青森県立自然ふれあいセンター 〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢1-1
 TEL 0172-62-4527 FAX 0172-62-8510 URL <http://www.jomon.ne.jp/~bonjyu/> メールアドレス bonjyu@jomon.ne.jp

□ フィールドカメラに写った動物 □

● マンガン登山口入口付近



5/19 3:30頃 ニホンカモシカ

この場所に設置して唯一撮影されたのがカモシカでした。沢を横断し、登山道の方へ向かっていきました。

● 観察の森



6/9 6:00頃 ニホンカモシカ

観察の森ではタヌキがよく写っています。たまにカモシカも来ているようで、カメラに気付かず近づいてきた姿が写っていました。

● センター裏 テラス



5/19 23:00頃 ホンダタヌキ



5/29 22:30頃 ホンドテン



6/10 21:00頃 アナグマ

夜のセンターの裏側ではホンダテン、アナグマが写っていることが多いです。稀にタヌキも写っていて、夜間は動物の通り道になっているように感じました。

●コヨウラクツツジ 齋藤 信夫（青森自然誌研究会）

ツツジという名前をもらっている植物は意外と多い。コヨウラクツツジは背丈2~3mほどのツツジ科の植物で、北海道、本州、四国、九州などと、日本列島に広く分布する。図鑑をひもとくと亜高山帯の林縁や岩場などに生える灌木との記述があるが、青森県ではそんな印象は感じられない。それでも、確かに里山などの低山帯で見かけることは多くないので、亜高山帯の植物として処理できようか。ツツジの仲間と聞けば、私達はすぐさまヤマツツジやムラサキヤシオ、さらにサツキなどのような、ラッパを広げたような目立つ花を連想するが、コヨウラクツツジの花は全く違う形であり、壺型（つぼがた）とか釣鐘形（つりがねがた）といわれる。壺も釣鐘も小さな花を地面に向かってぶら下げるものだから、ヤマツツジなどのラッパ型に比べると、ますます目立たなくなり、奇異に感じられる。同じような形の花にはドウダンツツジやハナヒリノキなどがある。

コヨウラクツツジの花の時期は5月~6月である。下向きの、直径6mmほどの、ややゆがんだ壺型になることが多く、花色は赤紫色あるいは橙色で、花びらの内側の色がやや薄いようだ。花びらは雌しべや雄しべを囲むようにすべてつながっており、先端だけが5つに分かれ、それぞれの先

端が外側に少し反り返る。花の柄には腺毛が目立つ。花が終わると球形の果実になるのだが、面白いことに、花は下向きだったが果実は上向きになり、果実の中央に長い花柱が突き出た姿になる。

梵珠山ではコヨウラクツツジはマンガン道から入った登山道が、最初の急斜面を登り切り、ブナやミズナラの多い緩やかな尾根沿いの道へと変わったあたりを起点にブナ平へかけて頻繁に出てくる。ただ、花が咲いている時期だと、その存在に気づくが、花が終わってしまうと、つい見逃してしまうことが多い。コヨウラクツツジと同じような場所に生えているホツツジ、ムラサキヤシオツツジ、ヤマツツジなどに混じってしまい、慣れないと区別しがたくなってしまふのだ。それらのツツジ科の植物はいずれも、やや乾性気味の環境に多く生育しているので、植生調査は、ことさら丁寧に、かつ慎重に進めることが重要となってくる。それにしても、植生調査はそれぞれの植物が最も区別しやすい花の時期に実施されることは珍しく、芽立ちだったり、落葉後や葉だけだったり、はたまた極端にいじけた葉形だったり、種を決めるのに難儀する場合が普通である。だから、現場ではいつも、ああでもない、こうでもないと思案に暮れながら記録するのが常である。



コヨウラクツツジの花 (2019年5月6日)



生長途中の果実 (2018年10月10日)
この頃には葉の損傷が目立つ

生物ごよみ (昨年)		7月										☀️☁️☔️ : 昨年の天気		℃ : 昨年の気温 (月最高気温)		低 : 昨年の気温 (月最低気温)																
日	曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
観察できたもの		ニワトコ実	カケス・アオケラ	エゾアジサイ花・オニヤンマ	オノヤガラ花・ルリシジミ	イチヤクソウ実・ウメカサソウ実	オカトラノオ花	ニホンカワトンボ・アカシジミ	クロサナエ・クジャクチョウ	コムラサキ・ノシメトンボ	ニホンカモシカ	ニホンザル	ノスリ・アナグマ	カケス	オオアカゲラ	メスアカミドリシジミ	ニホンザル	オニヤンマ	アオイトトンボ	ヤマナメクジ	アナグマ	キツリフネ花・ホンドテン	クサギ蕾・ヒグラシ初鳴き	クルマユリ花・キツリフネ花	ノシメトンボ	タカネトンボ	カフトムシ	オオウバユリ花・ヒメボタル	クサギ花・クス花	ヨツバヒヨドリ花	リョウブ花・アカシヨウビン	ハエドクソウ花・ミヤマアカネ
天		☔️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	
℃		23	26	25	18	23	23	22	21	23	22	23	20	25	25	22	23	26	27	22	26	24	24	25	30	30	30	30	30	30	30	31
低		16	16	17	16	16	16	14	13	13	12	14	16	16	16	16	16	17	17	20	18	18	18	19	18	20	21	22	22	23	24	

● 梵珠の昆虫「ミヤマアカネ」(トンボ科)

鳴海 富美子 (津軽昆虫同好会)

日本全土に分布する赤トンボの仲間ミヤマアカネで「深山茜」の意味である。全体は淡い褐色から橙褐色で、翅の端近くに濃い褐色の帯がある。一般に見られる赤トンボの中ではこの種にしか見られない特徴であり、赤トンボの仲間は識別が難しいが、本種は比較的判りやすい。雄は成熟すると腹部と翅の上部にある緑紋も真っ赤になってとてもきれいだが、雌は成熟しても赤くならない。

梵珠ではセンターへ行く途中の田んぼで、稲の上一面に群生して止っているのに出会った。羽化したばかりだったのだろう。まもなく姿が見えなくなり、やがて近くの湿地からセンター付近、キャンプ場の奥まで見られるようになった。

しかし、翌年は田んぼでの発生は少なく、その後は見かけなくなってしまった。同時に梵珠他の場所でも少なくなってしまった気がする。もっとも、私が行った時にはまだ羽化する前か、羽化して飛び去ってしまった

後だったのかもしれないが。

以前、山地の田んぼの稲の上すれすれに飛んでいる多くの本種がいたが、近くの道では群れを成して飛んでいるのに出会った。また、梵珠山頂からセンターと反対側にある河川敷でも多くが群れて飛んでいるのに出会っている。これらの場所ではその後の発生状況はどうなっているのだろうか。なかなかこのような幸運には巡り合えないのかも知れない。

梵珠では7月上旬から見ており、上旬では未熟な個体が多いが、雄はやがて真っ赤になる。8月末頃まで見ているが、9月に入ると見られなくなるように思う。

多くの赤トンボは水田や池、沼等水の流れの無い場所で生息するのに対し、本種は低山のゆるやかな流れのある場所で、トンボ科の中では珍しく流水中に生息する。

7月上旬から羽化し、秋に浅い水辺に集って来て産卵し、そのまま卵で越冬する。



ミヤマアカネ 雄



ミヤマアカネ 雌

生物ごよみ (昨年)			8 月			☀️☁️☔️ : 昨年の天気			℃ : 昨年の気温 (月最高気温)			低 : 昨年の気温 (月最低気温)																			
日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
観察できたもの	ネジバナ花・オオウバユリ花	ゲンノシヨウコ花	ミドリヒヨウモン	ヤマジノホトトギス花	アオバト	メスグロヒヨウモン	オニヤンマ	ヤマジノホトトギス花	ソバナ花	キバナアキギリ花	ホツツジ花	クス花	キセキレイ・ヤマガラ	オオルリボシヤンマ	ミヤマアカネ・オトギリソウ花	アオゲラ・コゲラ	モリアオガエル	エナガ・オオアカゲラ	ニューナイスズメ	アカソ花・タマブキ花	オゼイトトンボ・ツリフネソウ花	アケボノシユスラン花	オオルリボシヤンマ	ホントデン	ホツツジ花・コムラサキ	リスアカネ	アキノギンリヨウソウ花	シマヘビ	アケボノシユスラン花	ツリリンドウ花	ツリフネソウ花
天	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	
℃	32	32	30	30	31	33	32	32	29	24	23	28	29	26	28	31	29	31	29	23	24	25	27	26	24	24	26	27	27	26	26
低	23	21	20	20	21	19	18	21	22	19	18	19	21	20	20	22	24	21	20	20	20	19	20	19	15	14	13	19	19	19	18

●木の名前ときのこと

湯口 竹幸（青森県きのこ会）

きのこの標準和名の一部はバカマツタケ（五所川原地区）のように地方名がそのまま採用されている。当然ながら外見の印象が最多で、大きい、白い、表面が粗い、白髪状、群生、単生しているなど視覚情報を基にしている。これに臭いなどの嗅覚、辛い、苦い、甘い味覚や、ザラつく、滑るなどの触覚、更にイメージを拡大し動物になぞらえたらキツネ、ツル、クジラ、ヘビ、シラウオ、アリなど動物は一通り現れる。架空のムジナ、オニ、キリンとリュウもいる。道具からカサ、ミノ、ホウキ、クギ等もある。以上は五感由来で他分野と同じである。その次は発生環境から関連する樹木の名前を基にしているものが多い。マツ、スギ、ナラ、カンバ、エノキ、シイなどこれらの語尾にタケを付けると馴染みのあるきのことなる。DNA解析が重要になった現状では和名がなく、学名をそのままカタカナ表記するものも増えていてとても覚えにくい。

春の梵珠で出会うのは昨年残りの硬質菌以外には不明のクヌギタケの仲間が多いが、このグループは国内で数十種以上、世界的には数百種以上とされ未分類が多く難しい。次に出会う確率が高いのは「エノキタケ」の仲間がある。

鍋物でお馴染みの白いエノキタケはもやし栽培で、きのこの成長には光も必要である証となる。野生のエノキタケ傘は黄褐色～暗茶褐色でヒダが白く、柄は軟骨質で基部が黒っぽく微毛に覆われる。群生も単生もある。カキ、ヤナギ、ナラ、イチジク、ポプラ、ナナカマド、エノキ、コウゾ、ケヤキ、邪魔者扱いのニセアカシアにも発生する。由来のエノキ（榎）は、本県日本海側南部が北限であり、まだエノキに生えるエノキタケとそれを食樹とするオオムラサキは見たことがない。エノキタケ属は温帯中心に十数種あり、国内でも複数の可能性が高い。エノキタケ属はナラタケ属と同様に、キシメジ科からタマバリタケ科に移された。粘性が強いので地方によってはカキナメコ、アシグロナメコと呼び、ナメコと区別しないところもあるらしい。津軽では「ヌイド」「ユキノシタ」として親しまれているが、コレラタケの仲間とはしっかり区別したい。似た名前のピロードエノキタケはカサも柄も微毛で覆われ、胞子がやや大きく、ヒメカバイロタケ属で紛らわしい。冬越しの度に多くのきのこの名前を忘れてしまう。もしエノキタケがエノキだけに発生してくれたら、きのこの名前を思い出し易かったらどうか。



エノキタケ春



エノキタケ晩秋

生物こよみ(昨年)			9月			☀️☁️☔️: 昨年の天気			℃: 昨年の気温 (月最高気温)			低: 昨年の気温 (月最低気温)																		
日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
曜	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
観察できたもの	アケボノシユスラン花ノキグミ実	デンアナグマ・アサギマダラ	ホンドリス	モリアオガエル ミヤマクワガタ	サラシナシヨウマ花	オオウラギンスジヒョウモン	アナグマ	メスグロヒョウモン	ゴイシシミオクトリカフト花	ホンドリス	ウラギンヒョウモン	オトエシ花アキキリンシウ花	オツネントンポ	アキノノゲシ花・イヌタデ花	ツリフネソウ花	ツルニンジン花	カナヘビ・ニホントカゲ	ヒヨドリ	ミドリヒョウモン	コムスジ	アキアカネ・ノコンギク花	サメビタキ・ヒガラ	ノシメトンポ	ヒメアカタテハ	キバナアキギリ花	ムラサキシメジ	ホンドリス	ガマズミ実	アオタイシヨウ	オオアオイトトンボ
天	☀️	☁️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☔️	☀️	☀️	☀️	☁️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☁️	☔️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☔️	☀️	
℃	26	25	25	26	24	30	31	33	32	29	22	24	22	26	24	27	25	23	18	20	22	21	21	20	23	24	25	25	25	
低	16	16	15	15	15	19	20	21	21	19	16	13	12	12	19	20	14	13	10	10	10	12	15	14	9	8	10	13	15	14